

# 森の中の生活痕から、シカを見つけ出す

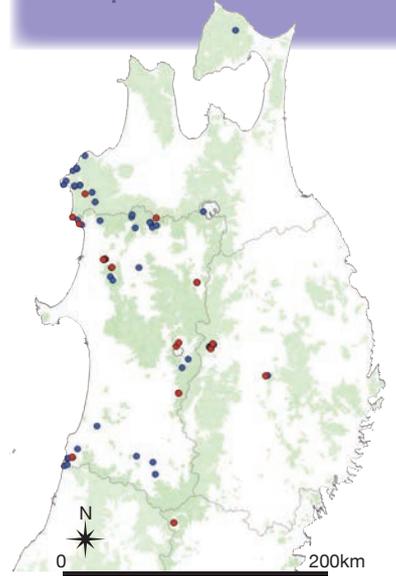


図1 食痕を採取した地点のうちシカ（赤）、カモシカ（青）が検出された地点

## ニホンジカの増加と森林生態系への影響

近年、シカをはじめとする野生動物の数が増えています。それに伴って、森林や農作物への食害、交通事故、人獣共通感染症の媒介など、わたしたちの暮らしに関わるさまざまな問題も大きくクローズアップされてきました。

なかでもシカは、エサとなる好みの植物がなくなると有毒な成分を含む植物まで食べ尽くして増えることができる、強い繁殖力を持った動物です。そのため、森林生態系に過大な影響をおよぼす存在になっています。生産の現場では、シカに食われて困る苗木や農作物などを柵で囲って防ぐなどの対策がとられていますが、シカの食害から守りたい山全体を囲い続けることはできません。

そこで、生態系としてほどよいバランス



写真1 秋田県田沢湖付近で見つかったシカの越冬群

がとれるように、シカの生息数をコントロールすることが、いま求められています。

## 生活痕からシカの存在を確認する

北東北では、明治時代から昭和時代のはじめにかけて一部の地域をのぞいてシカやイノシシはいちど姿を消しました。その後、農山村の過疎化などによって、近年再び分布を広げてきています。

わたしたちは、森林への影響が大きいシカについて、生息数が増えすぎてしまう前に早めに対応する方法を研究しています。そのひとつとして、雪国の厳しい冬でもシ

カが過ごしやすい場所である「越冬地」を見つけ「写真1」、集まっているシカを効率的に捕獲することを考えました。

森林で、ただシカの姿を探したとしても、まずみつきりません。そこで、シカの糞や食痕「写真2」など比較的に見つけやすい生活痕跡からシカの存在を確認することにしました「図1」。

しかし、シカの痕跡は同じ反すう動物であるカモシカのものと同じ目では区別が付きません。わたしたちは、検査薬「ニホンジカ・カモシカ識別キット」を使うことで、痕跡に残されたDNAから、シカかカ

# 研究者の横顔

## Q1. なぜ研究者に？

生き物の観察が好きで小中学生時代の夏休みの宿題は、毎年ミカンの木にやって来るアゲハチョウの観察をしていました。(高橋)

学生時代、マツ材線虫病の媒介昆虫であるカミキリムシを解剖した時に、体内から何万頭もの線虫が出てきたことに衝撃を受けました。それがきっかけです。(相川)

## Q2. 影響を受けた本は？

『科学のアルバム アゲハチョウ』(佐藤有恒 写真 本藤昇文 あかね書房)(高橋)

『笑うカイチュウ 寄生虫博士奮闘記』(藤田紘一郎 講談社)(相川)

## Q3. 研究の魅力とは？

シカはどんどん増えていくので、ほんとうに生息数を抑制できるか、シカとの時間の勝負と考えています。(高橋)

まだ誰も知らない世界を最初にのぞき見ることができる、それが魅力です。(相川)

## Q4. 若い人たちへ

興味を大事にされるとよいと思います。(高橋)  
何よりも現場に足を運ぶことが大切です。自分の目で耳で鼻でその現場を感じてください。本やスマホでは得られない事実がたくさん見つかるはずですよ。(相川)



高橋 裕史

Takahashi Hiroshi

東北支所



相川 拓也

Aikawa Takuya

東北支所

写真2 シカの歯型が残るササの食痕



写真3 食痕がいつできたものかを自動撮影で特定  
左上円内が自動撮影用カメラ。ちょうどシカが草を食べているところが撮影されていた。



写真4 カモシカの親子

行けばいつでもシカを見かけるような場所でも調査をしていた頃は、山にシカの姿を探して視線を遠方に向けていましたが、東北に来てからはシカの痕跡を探してうつむきながら歩くことが多くなりました。こうした調査では、ときおり視線を感じてふと見上げると、カモシカに見つめられているようなこともあります(写真4)。人と野生動物とのバランスのとれた関係をめざしたいものです。

### 捕獲と効果の検証へ向けて

こうした調査・研究によって、見つけやすい食痕からシカの存在を特定できるようになり、分布が広がってきた早い段階で生息を検出して対策に活かすことができようになりました。今後は、これまで経験的・感覚的に予想されていた越冬地を予測して地図化すること、特定した越冬地で効率的に捕獲すること、捕獲の効果をどのように評価できるか示すことなどが課題となっています。